

外国語科を使って主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
～分からなさに寄り添い、表現の幅を豊かにする活動を通して～

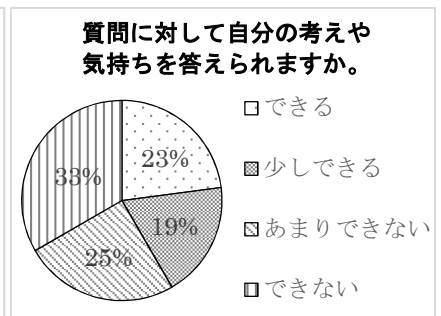
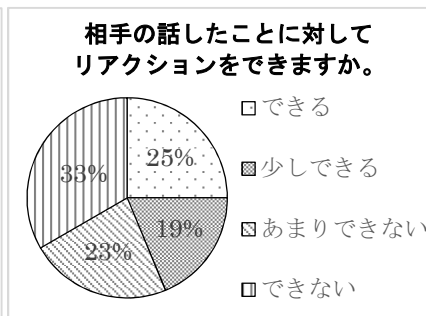
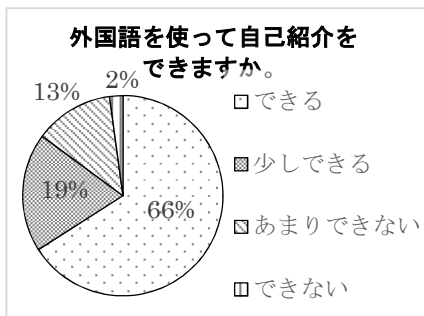
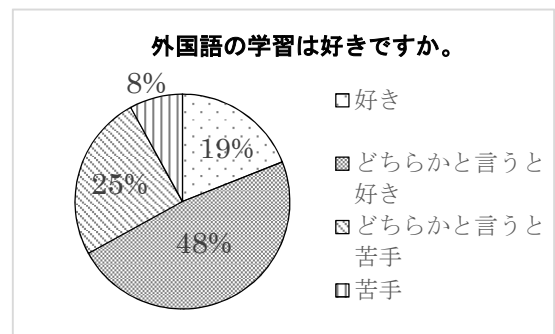
三ツ渚小学校 水野 雄太

1 はじめに

外国語科の小学校高学年で育成する資質・能力について、『小学校学習指導要領解説』では、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、（中略）自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。」と示されている。そこで、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことに関して、児童の意識を把握するために、担任した6年生児童を対象にアンケート調査を行った（資料1）。

【資料1 アンケート調査結果】

「外国語の学習は好きですか。」に対して、67%の児童が「好き」「どちらかと言うと好き」と回答をしている。「外国語を使って自己紹介をできますか。」について、85%の児童が、「できる」「少しできる」と回答した一方で、「相手の話したことにに対してリアクションをできますか。」は44%、「質問に対して自分の考えや気持ちを答えられますか。」は42%に留まった。



外国語科の学習について「どちらかと言うと苦手」「苦手」と回答した児童の主な理由として、「何を言っているかが分からない。」や「話したいことの外国語での言い方が思いつかない。」などが挙げられた。概ね、外国語の学習は好きだと感じてはいるが、外国語を使って実際にコミュニケーションを図る活動には自信が持てていないことが伺える。また、アンケート結果から、相手の話したことにリアクションをしたり、相手からの質問に応答をしたりする活動への苦手意識が高いことも読み取れる。

以上のことを踏まえ、外国語を使って主体的に他者とコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を目指す必要があると感じた。

2 目指す児童像

本研究では、児童の実態を踏まえ、目指す児童像を「習得した語句や表現を使って、主体的に他者とコミュニケーションを図ろうとする児童」と設定する。なお、「主体的に他者とコミュニケーションを図ろうとする」とは、相手の話したことにに対してリアクションをとったり、より詳しく話を聞くために質問したりするなど、意欲的に自分の考えや気持ちなどを伝え合おうとする姿を指す。

3 研究仮説と手立て

目指す児童像に迫るために、外国語を使ってやり取りすることへの苦手意識を軽減させる実践と、自分の考えや気持ちなどを伝え合う意欲を高める実践を行う。苦手意識を軽減させるためには、「話した外国語が相手に伝わった。」という経験と、「相手の話している外国語が理解できた。」という経験が必要であると考え。考えや気持ちなどを伝え合う意欲を高めるためには、自分の伝えたいことに合う言葉や、外国語を使ったやり取りでの新たな表現の仕方を知ることが必要であると考え。苦手意識の軽減と伝え合う意欲の向上によって、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童が育成できると考え、以下のように仮説を立てた。

仮説 1 「身近で簡単な事柄について聞いたり話したりする活動を継続的に行えば、外国語を使ってやり取りをすることへの苦手意識を軽減させられるであろう。」

身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりする Small talk を毎回の授業で行う。継続的に取り組むことで、話したことに対するリアクションの仕方を覚え、日常表現のやり取りに慣れることができると考える。相手がリアクションをしてくれることで「話した外国語が相手に伝わった。」と感じ、やり取りに慣れることで「相手の話している外国語が理解できた。」と感ずることができるとではないか。

仮説 2 「自分の伝えたいことに合う言葉や、やり取りで使える新たな表現の仕方を知る活動を行えば、進んで自分の考えや気持ちなどを伝え合う意欲が高められるであろう。」

「このように言いたいんだけど、外国語での表現の仕方が分からない。」といった理由から、自信をもてず、学習に前向きに取り組めない児童の姿をよく見かける。このもどかしさや分からなさを出せる機会をつくり、ふさわしい言葉や今後使える表現を獲得できる場を設定する。自分の伝えたいことに合う言葉や表現を獲得することで、それらを用いてやり取りをする意欲を引き出すことができるのではないか。

4 抽出児童について

アンケート調査により、外国語科の学習に対する意欲や普段の生活の様子から 2 人の児童を抽出した。

抽出児童 A は外国語科の学習に対して苦手意識が強い。学習態度は前向きだが、学習したことがなかなか定着しない。アンケートでは、「単元末に行うパフォーマンステストの際に、学習した語句や表現を忘れてしまうため、外国語は苦手。」と、記載していた。伝わった経験と理解できた経験を積むことで学習した語句や表現の定着を図り、苦手意識を軽減させたい。

抽出児童 B は外国語科の学習はどちらかと言うと好き。進んでやり取りを行い、全体の場で発言することも多い。アンケートでは、「既習事項を組み合わせる文を作ることが面白い。」と、記載していた。自分の伝えたいことを表現できる楽しさを味わい、やり取りをする意欲をさらに伸ばしたい。

5 実践と考察

(1) 仮説 1 の検証

苦手意識を軽減させるためには、分かりやすい学習を繰り返すことが必要である。そのためには、学習内容のインプットとアウトプットを継続して行うことが大切であると

考える。Small talk は、身近で簡単な事柄について、外国語を使って聞いたり話したりする活動である。簡単な日常表現やリアクションの仕方のインプットとアウトプットの双方を行い、学習内容を定着させることがねらいである。

授業では、児童を3名のグループに編成し、3分間のやり取りを行う。1人目が質問して2人目が答える、2人目が質問して3人目が答える、といったやり取りの仕方を示した上で、順番はグループごとに決めさせる。始めに質問する1人目は、シートA(資料2)の①～⑦からやり取りしたい表現を選び、2人目に質問する。2人目の答えに対して、1人目や3人目はシートB(資料3)からワードを選び、リアクションをする、というものが主な流れである。

シートはいつでも見られるように、児童の持つ外国語ファイルの裏表紙に貼付させた。シートAの答え方を確認した時には、多くの児童はシートの余白に答え方の話形をメモする姿が見られた。いつでもやり取りの仕方を確認できるようにしておくことで、児童が安心して取り組めるようにした。

抽出児童の変容を実際のふり返しやアンケート結果をもとに追う。資料4はSmall talkを通して、できたと感じたときについてのふり返しである。

【資料2 シートA】

Small TALK!!

- ①How are you?
- ②What's the date today?
- ③What day is it today?
- ④How's the weather?
- ⑤How old are you?
- ⑥When is your birthday?
- ⑦What do you like?

【資料3 シートB】

Reaction Words!!

Wow! Why? Nice!
Oh~! Me too!
Really? Great!
Again? Sounds good!

【資料4 抽出児童のふり返し】

児童 A

児童 B

1人目が話したときに、「オース！」と言ってくれる人がいるのでもそのときに下さと感じました

外国語で会話をしたときに相手が返事を返してくれたとき。

児童A、Bいずれも、話したことに対する相手のリアクションについて記述している。相手が返事をしたり、「Nice!」とリアクションしたりすることによって、自分の話したことの伝わりが実感できている。同時に、「できた。」という手応えをつかんだような記述が見られることから、苦手意識の軽減につながっていると言える。

資料5は、外国語科の学習において、伝わった経験と理解できた経験を実感しているかを調査したアンケート結果である。

【資料5 抽出児童のアンケート結果】

児童 A

児童 B

	1学期	3学期
相手に話したことが伝わったと感じますか	2	4
相手の話すことが理解できたと感じますか	2	4

	1学期	3学期
相手に話したことが伝わったと感じますか	2	4
相手の話すことが理解できたと感じますか	3	4

※ 数字はアンケートへの回答結果を数値で表したものの。
4「感じる」 3「少し感じる」 2「あまり感じない」 1「感じない」

児童A、Bともに、回答が4の「感じる」に変容していることから、伝わった経験と理解できた経験を積むことができています。特に、「相手に話したことが伝わったと感じますか。」については、いずれも「あまり感じない」から「感じる」に変容しています。資料4に関連して、話した相手に返事やリアクションをしてもらえることで、話したことが

伝わったという認識につながったと言える。

次に、学年の児童の変容を実際のふり返りやアンケート結果をもとに追う。資料6は他の児童が資料4と同様のふり返りについて記述したものである。抽出児童のふり返りと同様に、話したことの伝わりが実感できている。また、相手の話したことへの理解や、身近で簡単な事柄に関するやり取りの成立も実感できている。

【資料6 Small talkを通して、できたと感じたときについての学年の児童のふり返り】

外国語でちょっとした文でも会話ができたとき。

聞いたことのあるような単語が分かったときや長い英語の文が読めたとき。

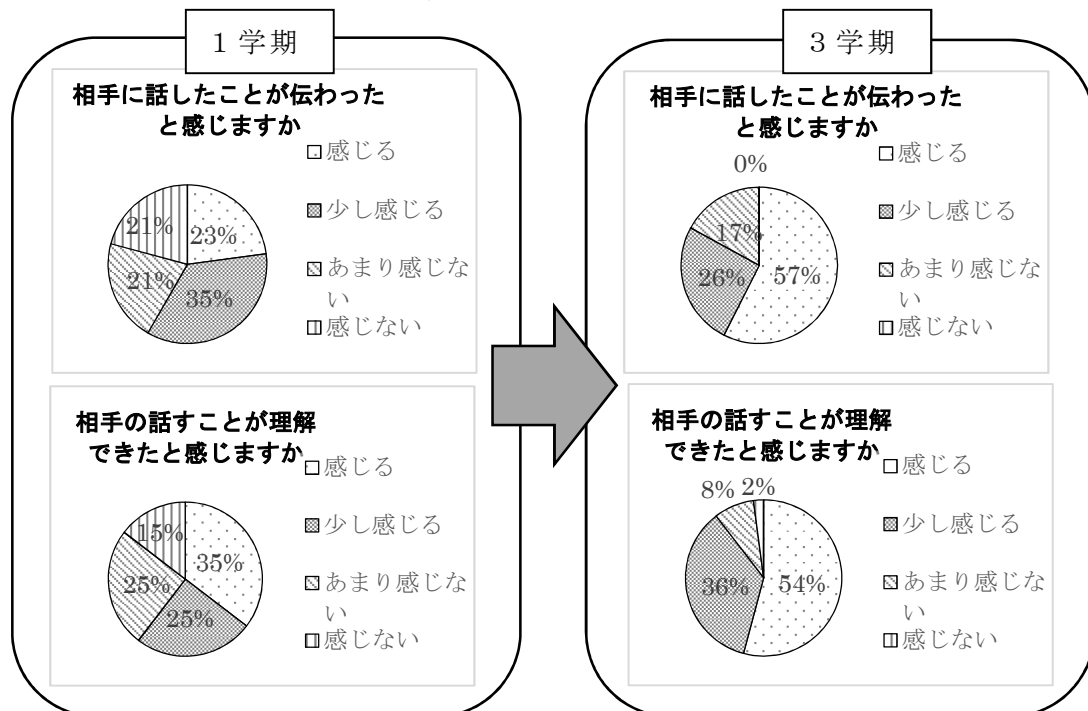
4と同じよう自分が話し相手に伝わった時と何をいってるか理解できた時。

自分の話したことが相手に伝わった時。

特に、単語の聞き取りや理解ができたという記述から、日常表現のやり取りへの慣れが伺える。このことから、継続的な取り組みが効果的であったことが裏付けられるであろう。多くの児童のふり返りで伝わる経験や理解できる経験に関する記述が見られたことから、これらの経験が苦手意識の軽減につながったと言える。

資料7は資料5と同様のアンケート調査の結果を比較したものである。「相手に話したことが伝わったと感じますか。」について、感じる・少し感じると回答した児童が、1学期は58%だったのに対し、3学期は83%に上がった。感じないと回答した児童は、1学期は21%だったのに対し、3学期は0%と、一人もいなくなった。また、「相手の話したことが理解できたと感じますか。」について、感じる・少し感じると回答した児童が、1学期は60%だったのに対し、3学期は90%に上がった。

【資料7 伝わる経験と理解できる経験に関する学年児童のアンケート結果】



「伝わったと感じますか。」「理解できたと感じますか。」に対して、「感じる」「少し感じる」と回答した割合がいずれも上昇したことから、継続的に Small talk に取り組むことで、伝わる経験と理解できる経験を積ませることができたとと言える。特に、「伝わったと感じますか。」に対して、「感じない」と回答した児童の割合が0%に変容したこと

については、相手に返事やリアクションをしてもらうことの有用性が実証されたと考えられる。また、「理解できたと感じますか。」に対して、「感じる」「少し感じる」と回答した割合が30%上昇したことについても、継続して簡単な日常表現を学習することが理解につながったと言える。

(2) 仮説2の検証

「このように言いたいんだけど、外国語での表現のしかたが分からない。」といった児童のつまずきを大切にしたい。このようなつまずきを表出して、ふさわしい言葉や新たな表現を獲得できる場として3つの機会を設定した。1つ目は、授業中の質問に対する即時解決である。Small talk のやり取りをする中で生まれたつまずきに対して、担任や ALT がその場でふさわしい言葉や表現を教え、全体で共有する。分からないことや疑問に思ったことはそのままにせず、担任や ALT に尋ねてもよい雰囲気をつくる目的で行った。また、仮説1で、外国語を使ったやり取りへの苦手意識を軽減することができたことから、進んでやり取りをしようという意欲の向上をねらうこととした。具体的には、授業中に知ったふさわしい言葉や新たな表現を、シート B に追記する形で表現の幅を広げていく。ふさわしい言葉や新たな表現を使ってやり取りをすることに楽しさや面白さを味わわせることができれば、自分の考えや気持ちなどを伝え合う意欲を高めることができるのではないかと考えた。

2つ目はふり返りシートに My Dictionary として分からないことを蓄積させた。児童がふり返りを書く際に使用する Feedback card に、「My Dictionary」という欄を設けた(資料8)。授業中、どのように言い表せばよいか分からなかった言葉や、今後使いたいけれど言い方が分からない表現などのつまずきを記述する欄である。授業中だけではなく、気軽に教師に尋ねられる場として設定した。ここに記載された事柄について、担任や ALT が返事を書き、次時の始めに児童へ返却する。また、新たに使えるような表現は「Dictionary UPDATE!」と題して、教室後方に掲示し、学級で共有を図った。

【資料8 My Dictionary】

Feedback	
Could you talk ?	Did you understand ?
Did you have fun ?	☐ Great ☐ Good ☐ Not so good
My Dictionary	

3つ目はタブレット端末の活用である。表現の仕方が分からない場合は、タブレット端末を活用して調べてもよいことを伝えた。人に尋ねることと同じくらい、自ら調べることも重要である。自ら調べて分かったことは記憶に残りやすく、語彙を増やすためには有効な手段であると考えた。新たに知った語句や表現などは Feedback card に書かせ、学んだことを蓄積できるようにさせた。「このように言いたいんだけど…。」というフラストレーションが解決され、新たな語句や表現を習得する喜びを味わうことで、進んでやり取りを行おうとする意欲が高められると考えた。

実際に児童から挙げたつまずきは、「ちょっと待って。」や「えっと。」の言い表し方のように、やり取りをする上で必要となる表現についてのものが多かった。また、「Can you...の質問はしてもよいですか。」や「昨日、何のテレビ番組を見たか聞きたいです。」のように、「Small talk」の話題を広げるための質問も挙がるようになった。自分の伝えたいことに合う言葉や、やり取りで使える新たな表現の仕方を知るだけではなく、やり取り自体を充実させたいという意欲的な姿が徐々に現れるようになってきた。当初はシート B に追記する形で表現の幅を広げる予定でいたが、児童の様子から、シート A も改良した方がよいと考えた。児童とともに、仲間と話してみたいトークテーマや、表現したいリアクションを挙げながら改良を加えたことで、シート A+ (資料9)、シート B+

(資料 10) が完成した。

シート A+は、児童の要望にあった「Can you...」を始め、小学校第 6 学年の外国語科 Unit3「Let's go to Italy!」にて学習する「Why do you ...」や Unit4「Summer vacation in the World」にて学習する、「What did you...」も組み込んだ。これらも、日常表現として十分に扱えるフレーズであったことから、学習の進捗に合わせて追加した。シート B+は、「Just a moment, please! (ちょっと待って!)」や「Let's see... (えっと)」、ネイティブがよく使う表現として「Awesome! (いいね!)」など、やり取りをする上で児童が言いたくなった表現を追加した。

【資料 9 シート A+】

Small TALK!!	
①How are you?	⑩Are you good at ...ing ?
②What's date today?	⑪What did you eat...
③What day is it today?	Where did you go...
④How's the weather?	What time did you go to bed... get up...
⑤How old are you?	What TV program did you watch...
⑥When is your birthday?	(yesterday? today? on ~day?)
⑦What do you like?	
⑧Why do you like ?	
⑨Can you ?	

【資料 10 シート B+】

Reaction Words!!	
!	Wow! Nice! Me too! Sounds good (great)! I see! Awesome!
?	Again? Really? Why? What's that? How's that?
+	Let's see... Just a moment, please!

抽出児童の変容を、アンケート結果をもとに追う。資料 11 は尋ねたり調べたりすることに関するアンケートの結果を比較したものである。

【資料 11 抽出児童のアンケート結果】

児童 A

児童 B

	1 学期	3 学期		1 学期	3 学期
外国語で言い表したいことを自分から尋ねたり調べたりすることができましたか。	2	4	外国語で言い表したいことを自分から尋ねたり調べたりすることができましたか。	3	4
外国語で言い表したい言葉や表現を知ることができましたか。	1	3	外国語で言い表したい言葉や表現を知ることができましたか。	2	4

※ 数字はアンケートへの回答結果を数値で表したものである。
4「できた」 3「少しできた」 2「あまりできなかった」 1「できなかった」

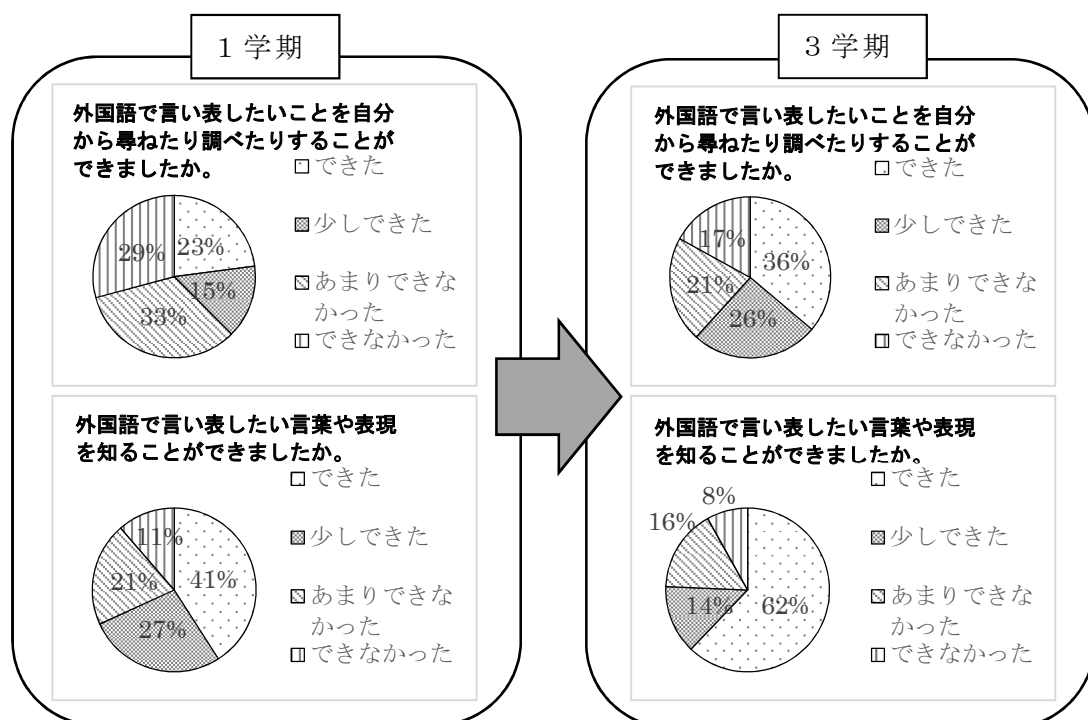
児童 A の 1 学期は、自身のつまずきがあまり表出できなかったことから、ふさわしい言葉や新たな表現を獲得することが難しかったという相関が読み取れる。3 学期は、「尋ねたり調べたりすることができましたか。」という質問への回答が 4 の「感じる」に変容していることから、「このように言いたいものだけれど…」という思いを解決できるようになったと考えられる。それに伴って、「知ることができましたか。」という質問への回答も 3 へ変容しており、つまずきを表出したことで、新たな言葉や表現を獲得することができたと考えられる。児童 B は、「尋ねたり調べたりすることができましたか。」「知ることができましたか。」のいずれの質問に対しても 4 と回答している。特に、「昨日、何のテレビ番組を見たか聞きたいです。」という、Small talk の話題を広げる提案をしたのは児童 B である。自分の伝えたいことに合う言葉や、やり取りで使える新たな表現の仕方を知ること、進んでやり取りを行おうとする意欲が高められたと考える。

次に、学年の児童の変容を、アンケート結果をもとに追う。資料 12 は学年の児童が資料 11 と同様のアンケートに回答した結果を比較したものである。「尋ねたり調べたりすることができましたか。」について、「できた」「少しできた」と回答した児童が、1

学期は38%だったのに対し、3学期は62%に上がった。また、「言葉や表現を知ることができましたか。」について、「できた」「少しできた」と回答した児童が、1学期は68%だったのに対し、3学期は76%に上がった。

抽出児童の検証結果と同様、つまずきを表出することで新たな言葉や表現を獲得することができたと考えられる。授業中だけではなく、My Dictionaryやタブレット端末を活用するようになったことで、「このように言いたい。」という思いを自身で解決できるようになったと考えられる。また、シートA、Bの内容項目が充実したことから、表現の幅を広げることができたとと言える。特に、児童から既習事項を用いた質問や、新たなやり取りの提案がなされた姿から、自分の伝えたいことに合う言葉や、やり取りで使える新たな表現の仕方を知ること、自分の考えや気持ちなどを伝え合う意欲が高められたと考える。

【資料12 尋ねたり調べたりすることに関する学年児童のアンケート結果】



6 研究の成果と今後の展望

資料1のアンケート調査の1学期と3学期の回答を比較し、その変容を研究の成果とする。「外国語の学習は好きですか。」の質問に対して、66%の児童が「好き」「どちらかと言えば好き」という回答をした1学期に比べ、3学期は71%と、好意的な回答の割合が上がった。以下、同様に、「できる」「少しできる」と回答した割合を1学期と3学期で比較したところ、「外国語を使って自己紹介をできますか。」は85%から89%に。「相手の話したことにに対してリアクションをできますか。」は44%から57%に。

「質問に対して自分の考えや気持ちを答えられますか。」は42%から58%にになった。いずれの項目においても、「できる」「少しできる」と回答した児童の割合が上昇したことから、身近で簡単な事柄について聞いたり話したりする活動を継続的行ったことで、伝わった経験や理解できた経験が積み重ねられ、外国語を使ったやり取りへの苦手意識を軽減させることができたと考えられる。

児童の声によってシートAとシートBが改良され、やり取りの中で活用された点も成果と言える。実際に、追加されたフレーズを使って、多くの児童が話題を広げたり、リ

アクションをしたりする姿が見られた。英会話でよく扱われる表現を知ること、身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを伝え合いやすくなったと考えられる。また、My Dictionary やタブレット端末を活用する姿が増えたことで、「このように言いたい。」という思いが解決され、自分の考えや気持ちなどを伝え合う意欲が向上したと考えられる。

外国語を使ったやり取りへの苦手意識を軽減させること。自分の考えや気持ちなどを伝え合う意欲を向上させること。これらの手立てにより、習得した語句や表現を使って、主体的に他者とコミュニケーションを図ろうとする児童の姿に迫ることはできた。その一方で、「相手の話したことに対してリアクションをできますか。」、「質問に対して自分の考えや気持ちを答えられますか。」という質問に対して、「できる」「少しできる」と回答した割合はいずれも60%に満たなかったことから、半数近い児童の苦手意識は依然として残ることとなった。ふさわしい言葉や新たな表現を獲得したとしても、それをやり取りの中で活用することは難易度が高いと推察される。特に、外国語を使った1対1のコミュニケーションにおいて、相手の返答に対してさらに質問をしたり、より詳しく話したりするなどの双方向のやり取りを実現することは難しい。学習を通して、より多くの語彙を獲得することや、質問の仕方や詳細の話し方を知ることが望まれる。

本研究を通して、児童に「できた。」、「分かった。」という経験を積ませ、外国語を使ったやり取りへの苦手意識を軽減し、自分の考えや気持ちなどを伝え合う意欲高めることの重要性を再認識することができた。このような成功体験を、日々の学習の中で味わわせ、積み重ねていく意識をもち、これからの授業改善に取り組んでいきたい。